

『次郎物語』と私——座談会を終えて 高宜良 精神科医、こう心療クリニック院長

何を勘違いしてくださったのやら、私ごときが高木さんと同列に並べられて面映ゆい限りですが、座談会をお読みいただくとわかる通り、私としては精神科医の大先輩である高木さんにインタビューさせていただくというスタンスで参加しておりました。

事前にいただいていたご質問に「本から受けた影響」と「アイデンティティ」についての項目がありました。私のアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしている『次郎物語』について人に話すのは、おそらくこの座談会が初めてです。おかげで、今年のゴールデンウィークは、ほぼほぼ作者下村湖人について考える時間となりました。次郎物語を読み返し、佐賀県神埼市（同市には吉野ヶ里遺跡もあります）にある下村湖人生家を訪ね、「若き建設者」という下村湖人の兄をモデルにした精神病者が出てくる小説も初めて読みました。好きなもの（推し）にひたる楽しい時間を満喫し、「自我に奉仕する退行」を実践しました。

『次郎物語』は、第一部から第五部までから成る長編小説です。第一部を知っている方はおられても、第五部まで全部読んだ人に出会ったことがありませんでした。ところが、座談会の後で、ほかの読書会で次郎物語を話題にしたところ、通読している方がおられることが判明しました。自己開示の返報性とはありがた

いものです。

次郎物語には著者下村湖人の実体験が色濃く反映されています。

次郎の「運命」は生後間もなく2歳上の兄と引き換えに里子に出されることから始まります。これは彼自身にはどうしようもない出来事です。そして、そのために彼は実家に戻ってからも実母と父方祖母からの十分な愛を受けられず、母を怒らせ困らせる行為を繰り返します。そんな次郎の成長を家庭、学校、社会との関わりの中でたどることで、人間の「運命」と「愛」と「永遠」を下村湖人は思索しようとしています。

座談会の最後に触れた松の木について次郎の叔父（継母の弟）が語る部分を抜粋します。

「君たちには、あの岩が動いているのがわかるかい。」

「目で見たってわからんよ、心で見なくちゃあ。」

「強いのは松の木ばかりではないさ。命のあるものは、何だって強いんだ。草の根でも、それがはびこると石垣を崩すことがあるんだからね。」

「何百年かの昔、一粒の種が風に吹かれてあの岩の小さな裂け目に落ち込んだとする。それはその種にとって運命だったんだ。つまり、そういう境遇にめぐり

合わせたんだね。そんな運命にめぐり合わせたのはその種のせいじゃない。種自身では、それをどうすることもできなかつたんだ。わかるだろう。」

「そこで、運命を喜ぶということなんだが、どうすることもできないことを泣いたりうらんだりしたって、何の役にもたつものではない。それよりか、喜んでその運命の中に身を任せることだ。身を任せるというのは、どうなってもいいと言うんじゃない。その運命の中で、気持ちよく努力することなんだ。それがほんとうの命だ。あの松の木の種には、そういうほんとうの命があった。だから、しまいには運命の岩をぶち破り、それをつきぬけて根を地の底に張ることができたんだ。松の木は今でも岩にはさまれたまままだが、もうそんなことは、松の木にとって何でもないことになってしまったんだ。」

「君らはこれまで、運命と闘うように教えられて来たかもしれない。それもうじゃない。結局は運命に勝たなければならんからね。だが、闘うことばかり考えていると、つい、無茶をやるようになるんだ。無茶では運命に勝てん。勝とう勝とうとあせって、自分の力に及ばないことや、道理にはずれたことをすると、かえって負ける。芽を出したばかりの松は、どんなに力んでみてもすぐには岩は割れない。また大きくなった松でも、幹の堅さだけで岩を割るわけにはいかない。岩を割る力は幹の堅さではなくて、命の力なんだ。じりじりと自分を伸ばして行く

命の力なんだ。だから、運命に勝ちたいければ、じりじりと自分を伸ばす工夫をするに限る。勝つとか負けるとかいうことを忘れて、ただ自分を伸ばす工夫をしてさえ行けば、おのずとそれが勝つことになるんだ。」

「だが——」

「自分を伸ばすためには、まず運命に身を任せることがたいせつだ。岩の割れ目で芽を出したら、その割れ目を自分の住家にして、そこで楽しんで生きる工夫をするんだね。岩を敵にまわして闘うのじゃない。むしろありがたい味方だと思って、それに親しんで行く。それでこそほんとうに自分を伸ばすことができるんだ。運命を喜ぶものだけが正しく伸びる。そして正しく伸びるものだけが運命に勝つ。そう信じていれば、まず間違いはないね。」

下村湖人もまた、この松の木のような困難に満ちた人生を送りました。

里子に出され、実母と死別し、父は商売に失敗し、継母は弟を可愛がり、兄は精神の病に陥ります。一時は大学進学をあきらめますが、郷里の有力者下村家の資金援助を受けて東京帝国大学文学部英文科に進学、夏目漱石が教授のころです。しかし、下村家も没落し、文学の道をあきらめ郷里で中学教師となります。下村家に養子に入り家財を整理するにあたっては、並々ならぬ葛藤があり、酒におぼれた日もあったようです。

精神病の兄は農家に預けられ、30代で

なくなります。もう一つの続次郎物語と呼ばれる「若き建設者」の中には、兄がモデルと思われる精神病者が登場します。兄は、ある意味もっともまっとうな感性の人としてトリックスターの役割を果たし、労働を通じた地域共同体建設への参加によって安定していきます。その姿と周囲の関わりは、今読んでも示唆に富む点が多く、下村湖人の透徹した先見の明に驚きますし、私宅監置時代の貴重な歴史的資料にもなっています。

というわけで、臨床「文藝」医学の観点からも、下村湖人研究はやりがいのある仕事になりそうです。

ところで、なぜ次郎物語が私のアイデンティティ形成に関係するのか、それは、次郎は自分の境遇をさかのぼるといつも「里子」にたどりつくのです。家族の愛も、友情も、恩師との出会いも、元をたどれば里子に出されたことから始まります。その影響で、おりにつけて今の自分をたどるとどこに行きつくのかを考える癖があるのですが、私の場合は結局すべて「在日朝鮮人」であることにたどりつきます。職業的アイデンティティである精神科医になって得られたものは、すべて中井久夫先生から与えていただいたご縁によるものです。高木さんと知り合ったのも中井先生のおかげですから、この座談会も中井先生のおかげです。そして、なぜ中井先生が私に親切にしてくださったかというと中井先生なりの朝鮮人への罪ほろぼしの感情からだと思います。質問をいただいたときに思ったのですが、

私にとっては、アイデンティティとは民族的アイデンティティをどう考えるかというテーマ以外にはありえないものです。それ以外のアイデンティティについては、深く考えたことがないことに気づきました。その点については、これから考察を深めたいと思います。

というわけで、座談会を通して、自分の楽しみを見つけ、自分のことばかり考える、およそ下村湖人の教えからは程遠い「エゴ」だらけの私を確認して感想を終えたいと思います。